

# 黒岩四方之進と直別

榎 原 政 和

## I. 入植当初

直別の地名は、アイヌ語のchuk-petからとったもので、chukは秋を、petは川または沢を意味している。この直別は昔から秋にはよく大雨による大洪水で、部落民が大いに悩まされたものであり、そのことからこの地名が付けられたものと思われる。

さて、直別にはいつ頃から人が住みついたのであろうか。それは、1889（明治22）年ころのことと言われているが、直別川の最下流の一角に駅逓所を設営した高島文吉（現釧路直別高嶋政文の祖父）が最初と言われている。今から40年ほど前までは、その地点に「直別発祥の地」と書いた標柱が建てられていたが、今は見ることができない。

その後、釧路直別は木無別川から今の市街地にボツボツ人が住み始めたと言われている。

## II. 黒岩農場の誕生

1899（明治32）年ごろ、黒岩農場の先発隊として、日高の新冠より陸路（海岸線に沿って）直別に入植したのが中島久太郎、松永末八、渡辺友次郎らであり、一号沢の上野義隆氏の付近に仮設営をして、黒岩四方之進を迎える準備を始めたのがこの直別の夜明けともいべき開拓の始まりである。

先発隊は、現在残っている唯一の黒岩農場を物語る農場跡地の建物（田中忠助氏所有地内の住宅）や小作人の住居の建築や道路の開削に当ったこと

が推定される。一号沢から黒岩農場まで約6kmの道路造成と、家屋倉庫の建設に4年の歳月を費していることからしても、並大抵の労働ではなかったことが想像される。

1903（明治36）年、黒岩四方之進は日高新冠御料牧場長（当時は主馬守と言った）を退職し、直別の開拓にすべてをかけ、フロンティア精神と理想郷づくりの情熱を全身に燃して、先発隊の待つ直別にカイゼル髭もりりしく白馬にまたがり、木の香もすがすがしい農場建物前にその第一歩を踏みしめた。

黒岩四方之進は、直別の土地を道庁が示した「土地払下規則」（明治19年6月制定）により、2,000町歩の払下げを受け、現在の横井・十条製紙KK所有の山林を平地は釧路直別にまで跨っていた。

黒岩四方之進一行が、どのような経路で直別へ移住したのか解説しようもないが、当時の交通機関がどうであったかというと、先に触れた駅逓所が官営によって各所に点在し、これが旅人の往来をする中での唯一の宿泊所であり、水先案内役割を果していた。一方、当時は海上輸送が盛んであり、釧路港や大津は早くから開けていた。北海道が徐々に開発され、産業・経済の交流の中で交通確保の必要性は欠くべからざるものであったのである。

1900（明治33）年4月、北海道鉄道部は釧路工区を置き、現在の根室本線の敷設工事にとりかかった。翌1901（明治34）年7月、白糠線開通、続いて1903（明治36）年音別間開通、同年12月浦幌

## ■ 目 次 ■

黒岩四方之進と直別 .....	榎原政和 .....	2
十勝太のチャシについて .....	後藤秀彦 .....	8

表紙写真：豊北のタンチョウ 本年10月9日に豊北地区でみかけた3羽のタンチョウ。うち

1羽は幼鳥である。近くに営巣地があるという人もいる。（後藤秀彦）



PL. 1 黒岩四方之進の像

まで開通、逐次帶広へ向って進んでいくことになる。1905（明治38）年10月帶広間、そして1907（明治40）年新得間が開通した。

黒岩農場のためにできたといわれる直別駅は、

1907（明治40）年10月25日に開業された。直別に駅のなかったころは、木材等を線路脇に積置きして汽車を止めて、一定時間内に積込みをしたということである。

さて、この事実から黒岩四方之進一行は新冠より海上を釧路へ、そこから鉄道で音別駅へ、そこから歩いてということが推定されるが、これとは別に大津まで船で来て、海岸線を直別まで歩いてきたという想定も可能である。

### III. 黒岩農場の生活

さて、黒岩農場を興した黒岩四方之進は安政3年5月22日、高知県安芸郡川北村松田島で士族黒岩一郎・信子の長男として生まれた。明治9年札幌農学校（現北海道大学農学部）に第一期生として入学。かの名言「ボーイズ・ビー・アンビシャス（少年よ大志を抱け）」を残して去ったウイリアム・クラーク先生の門下生である。手稲山に雪中行軍をした折、榆の大木についているヒカリゴケを探るのに、当時としては大男であった黒岩四方之進がクラーク先生の肩を土足のまま踏み台とし



PL. 2 大正13年ごろの黒岩四方之進の住宅



P L. 3 大正3年ごろの直別の人々（後方 角積校舎）



P L. 4 稲岡才治校長当時の児童と父兄



P.L. 5 黒岩農場の建物（一部3階建）

てそのヒカリゴケを採取した話は余りに有名であり、今なお『北大史』に残る逸話として知られている。

クラーク先生のキリスト教精神が当然のことのように門下生の心の中に受け継がれていったことは自然のなりゆきであり、黒岩四方之進夫妻も敬虔なクリスチャンであった。また、高邁なる人格者であり、威風周辺を制するという言葉がぴったりの紳士であり、「神は愛なり」をモットーに人も家畜にもすべてのものに豊かな愛情をもって接せられたという。働く者すべてが氏を「先生」と尊敬し、いつも白馬にうちまたがり、仕事の指揮に当られ、冬は馬橇に乗っての往来で、付近の者たちは最敬礼して見送ったという。

活気に満ち溢れた開墾も順調に伐採・抜根がなされ、大地に鋤が振られて、食糧となる馬鈴薯や野菜が植えられて、少しづつ青空が広がっていった。

黒岩農場では、働く人達のために生活物資のほとんどを事務所に置き、必要に応じて与えられ、週1回定められた日に米・味噌・醤油などを配給

していた。

また、直別に入植すると同時に小作人達の子弟教育を重んじ、通常言われるところの寺小屋方式の学校を設立した。正式には2年後の1905（明治38）年に厚内教育所付属直別教授所が出来、ここから直別小学校の歴史が始まる。このとき、黒岩四方之進は学校敷地として1万5千坪（約5ha）を寄贈している。

年を追って、農場も次第に整備拡充され、当時アメリカから輸入した最新鋭の抜根機が使用され、耕地が拡大された。一方、非常に動物好きであった黒岩四方之進は馬・牛・山羊・豚・鶏・ウサギなどを飼育され、また椎茸栽培を実施した。それらの建物、柵などもめぐらされ、大きな門柱が2本、それに大きな板に大書して「黒岩農場入口」と看板が掲げられ、許可なく農場内に立ち入ることができなかった。

黒岩四方之進が入地を果された時点で、当時何人くらいの人がいたか全く不明であるが、先にあげた先発隊の中島・松永・渡辺の3名のほかに、橋本・福井の計6戸は一号沢におり、随行したと

思われる川端、二階堂、中井、橋、大場、三田の各氏は農場周辺に住んでいた。また、農場の開拓につれて小作人として、又は稼ぎ人として期間は不明であるが石垣、名畑、沢井、桜庭、糸谷、米沢、松本、佐々木、吉田、阿部などという人がいた。

釧路直別の山本範綱氏の祖父山本権兵衛や榎原政次郎も一時農場で働いていたようであり、後から櫛屋敷勘吉ら数名が出入りしていた。

これらの人々によって開拓はどんどん進み、原野は耕地化され、山林は造材がなされ、見事な材木が切り出され直別駅に運搬された。また、一方では木炭を焼くなどして、日を追い、年を追って活気溢れる農場が次第に形成されていった。このようにして、明治から大正に推移していくが、この間、山本・榎原の両氏は独立して釧路直別へ移転した。

このように明治から大正の初め頃が一番活気のある時代で、当然戸数も人口も、そして児童数も一番多い時代で、推定して大正5年から昭和6、7年くらいまでの間が余り変動の少ない安定した時代で、児童数からして戸数は50戸前後、人口は

300人余りではなかったかと思われる。

当時の直別小学校の校舎も、大正3年角積み校舎という幅20cm以上もある角材を積み重ねたもので、部落の人々の協力のもとに建築され、昭和10年ごろまで使用された。

かくして、黒岩農場は苦難の開拓時代を乗り越えて、明治・大正・昭和へと進んでいったのである。

#### IV. 黒岩農場の終息

1929（昭和4）年6月26日、偉大なる直別開拓の始祖、黒岩四方之進が死去した。享年74歳であった。

黒岩四方之進の死去に伴い、直別の組織や構成が大きく変化するところとなったが、その前に黒岩家の家族構成について若干触れておく。

黒岩四方之進には実子がなく、弟の周六（作家として著名な黒岩涙香）の次男宣光を後継者として養子縁組し、慶という女性も叔父黒岩直方より養女縁組をしており、この2人が四方之進の子供であった。宣光（明治27年生）は四方之進と同じ



P.L. 6 アメリカより輸入した抜根機による抜根風景（河西支庁、1911）



P L. 7 入植当時の榎原政次郎宅



P L. 8 民有未墾地入地10周年記念式

く札幌農学校を卒業して東京に居り、四方之進の死後直別へ来て、遺産の相続をすると同時に資産の処理に当った。

一方、慶（明治29年生）は四方之進とともに直別へ来て明治44年直別小学校を終り、大正7年6月、22歳で久野喜十郎を婿養子として迎え、一女喜美をもうけたが、大正8年12月に離婚した。

黒岩四方之進は生前の昭和2年に山林の一部を当時釧路直別で大きく木工場、薪炭業を経営していた池端伊太郎に売却しており、死後は宣光に農場の事業を継ぐ意志がなく、農業経営にも無関心であったため、結局全財産を池端伊太郎に売却し、死後1年10ヶ月余りの間に一切の財産を処分して東京に戻った。残された黒岩四方之進の夫人テツと娘慶は孫の喜美の小学校卒業を待って、昭和6年5月、27年間続いた黒岩農場をあとに釧路へ移った。

#### V. 直別部落の誕生

黒岩農場を買収した池端伊太郎は、農耕地の一部100町歩余を北海道庁に買い上げて貰い、山林については造材を行った。

昭和6年5月、黒岩テツらの引払った後、それまで小作をしていた中の10名が自作への転換を望

んで、今野務を先頭に小作解放運動を展開した。つまり、池端伊太郎が北海道庁に売却した土地に対し、民有未墾地として払い下げをして貰うということで、大津村役場・十勝支庁を通して積極的にこの運動が行われた。

柳屋敷勘吉・大場巳之吉・中井多三郎・二階堂貞作・三田龍五郎・福井義政・橋本重三郎・小林政一・平井政勝・渡辺卯之助、これら10名の熱心な運動が効を奏して、2戸分という土地の確保ができる、各々が自作農として再出発することとなった。昭和7年8月5日のことである。

このころは既に山林のほとんどが用材その他に切り出され、小径木は木炭にすることで、さしもの大密林も丸坊主となってしまい、池端伊太郎の木工場も閉鎖された。そして、この木材の切り出された約1,000町歩の農場山林は売りに出されるところとなった。

また、直別神社は昭和8年ごろ、部落の守護神として、先代の橘、川端氏らの協力により現在地に建立されたと伝えられている。

（浦幌町郷土博物館協議会長）

#### 参考文献

河西支庁（1911）『十勝国産業写真帖』 帯広

## 十勝太のチャシ跡について

後藤秀彦

### I

浦幌町十勝太地区は浦幌十勝川（旧十勝川。以下「十勝川」という。）川口に開けた漁業・酪農業を主産業とするさびれた集落である。

当地区は、古文書などにより江戸時代中期には既に開け、コタンの形成なども顕著であったことが知られており、さらに前時代の擦文時代の集落跡も多く、太平洋と十勝川を機軸とした生業体系の中で変遷してきた地区である。

この十勝太地区が古文書の中で最初に登場するのは、著名なオランダ商船カストリクム号の航海日誌および船員の証言記録においてである。1643

（寛永20）年、難破した同船が十勝沖に漂着し、同地のアイヌと接触した記録であり、地名についても明瞭に「Tacaptie」と答えており、この地が十勝川々口左岸集落「トカチ（プト）」を指すことに疑いはない。

また、これより先の擦文時代の集落は、十勝川北岸の河岸段丘上に連なって分布し、そのうちの一部は発掘調査も行われている。

当地の学術的な調査は、1934（昭和9）年ごろから斎藤米太郎によって始められた。この調査は、当時、大津村立静内小学校や十勝小学校で教鞭を取っていた米太郎が『大津村史』執筆のために行った遺跡分布調査の一環として実施され、後には